

離島と映像——メディアを活用した地域の再発見

伊豆諸島シネマセンター代表 大澤 未来

一 団体名 伊豆諸島シネマセンター

一 事業名 一八丈島と青ヶ島の宝を見つけ、育てるプロジェクト

一 映画鑑賞イベントを島で開催

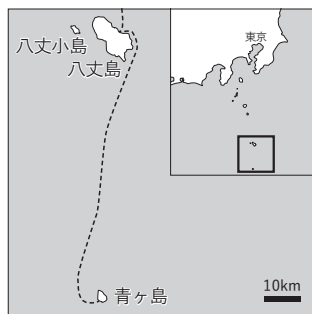
八丈島は、伊豆諸島に九つある有人島の南から二つ目に位置する人口約六九〇〇人の島だ。東京から約三〇〇キロ離れた隔絶性と、空路・海路での良好なアクセス性を有している。島の西側には一九六九年に住民全員が離島し、現在は無人島となった八丈小島が勇壮な姿を見せる。その七〇キロほど南には人口約一五〇〇人の青ヶ島が海から屹立している。青ヶ島は天明五（一七八五）

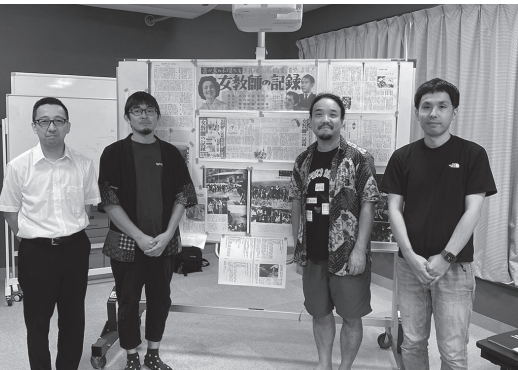
年の大噴火による八丈島への全島避難から、三十数年をかけて帰島（かえりま）を果たした壮絶な歴史を背負った島だ。

伊豆諸島シネマセンターは、ドキュメンタリー映画監督である筆者が、青ヶ島での映画制作の準備拠点をつくるため、八丈島と中野区との二拠点生活を始めたことをきっかけに、二〇二一年六月に設立した。映画館がない離島で多様な映画の鑑賞機会を提供するとともに、個人で映画が視聴できる時代にわざわざ不特定多数の人間が集まっ

て映画を鑑賞することの意義を体感するために、上映後、島の方々と協働でアフタートークやワークショップ、音楽ライブや写真展などを開催してきた。

上記活動と並行して、過去に制作された伊豆諸島に関連する映画や映像の調査を進めるなかで、上映後の時間を濃密な体験の場にするため、当時の雑誌や新聞に載った写真や文章、関連書籍を発掘、分析する必要性を強く感じた。そこで、本助成を活用して資料調査と島でのワークショップを実施した。





青ヶ島の講座にて。右から2番目が筆者。

― 青ヶ島と八丈島での魅力発見講座 ―

本事業の前半は、国立国会図書館や国立映画アーカイブなど東京に所在する施設を訪問し、横断的に資料調査を進めた。調査は二回に分けて合計六日間実施した。

後半は、島で二つの講座を開催した。「青ヶ島の魅力発見講座」では、『青ヶ島の子供たち 女教師の記録』の上映とワークショップを青ヶ島と八丈島で実

施。青ヶ島の会場では、当時の映画が

掲載された雑誌や映画批評文を掲示し、青ヶ島生まれの荒井智史さとしさん（NPO法人選住舎代表）と一緒に映画の分析から始め、参加者をグループ分けしてディスカッションを行ない、最後に全体共有の時間を設けた。映画制作当時少年だった佐々木宏さん（現青ヶ島村長）が、当時の状況について映画と比較しながら体験談を熱く語る場面もあり、青ヶ島で教員をされていた方など、多くの参加者が離島で生活する事の苦勞と喜びを共有する、充実した内容となった。講座の最後には、青ヶ島から八丈島への手紙、八丈島から青ヶ島への返信を参加者に書いてもらい、活動冊子『離島と映像』に掲載した。

「八丈島と八丈小島の魅力発見講座」は、八丈島で開催した。事前準備で八丈小島出身者への聞き取りや、小島に關する論文や書籍を調査したところ、彼らの「言葉」がわずかしか残されて

いない現状が分かった。そこで私たちは、小島出身の方に登壇を依頼したが、「不特定多数の前では話したくない」とお断りされた。私たちは集団離島における合意形成と差別の問題に気づかされ、離島に至るまでの意思決定のあり方を議論する講座を構想した。

講座当日は、小島の集団離島の前後を映した一六ミリフィルムを参考上映し、当時の写真や雑誌記事を共有した後、島嶼たちやまコミュニティ研究の専門家である立柳聡先生（福島県立医科大学）を交えてワークショップと懇親会を開催した。会場を提供いただいた、島の生き字引でもある民宿ガーデン荘女将の福田栄子さきこさんを加えて、離島でより良く生活するための住民の意思表示の重要性について議論する契機となった。

― 講座を通して得た気づき ―

青ヶ島と八丈島で行なった「魅力発



八丈島・ガーデン荘での講座の様様。

見講座」は、より多くの、島内のさまざまな立場の方に参加いただけるよう各回二日間の開催とした。広報についてもSNSだけでなく、島内各所でのポスター掲示や防災無線での放送など、高齢者にも配慮した工夫を行なった。これらの試行錯誤を通して、私たちは「住民がイベントに足を運びやすい環境」という離島における独自の工夫の必要性を実感できた。

「魅力発見講座」によって、私たちは各島々の「魅力」を下支えしているのは、各時代に島で生きた人々がそれぞれ

の苦難を乗り越えて、それでも島で生きることの喜びや誇りを創り出すために闘ってきた〈時間の総体〉であることを浮き彫りにしようと試みてきた。青ヶ島の講座から見えてきたことは、本土並みの生活水準を築き上げる歴史の途上で、選挙の権利や教育の権利をめぐり、内地から赴任した教育者による問題提起や行動が住民の意識に少なからず影響を与えてきたという側面。

絶海の孤島というイメージを誇張して一方的に消費しようとしてきた内地メディアの問題。そして江戸時代の噴火による全島避難からの帰島（還住）や昭和の大変革期などの幾つもの困難を乗り越えたエネルギーの源が、島で生きた祖先との繋がりがや過酷な自然条件の中で続いてきた「祈り」の文化であるということである。

また、八丈島と八丈小島の講座では八丈小島における集団離島のプロセスや小島出身者による語りを、私たちが

どのように受け止めてきたのか。個々が経験してきた実感を共有することの困難さがなぜ生じてきたのか、という問題に直面した。メディアはセンサーシオナルな「秘境」という文脈で八丈小島を語り、戦後民主主義社会の中で憲法上の人権や生存権が脅かされていた問題を直視してこなかった。またそのような歴史を私たちが八丈島で未来に向かってどのように受け取り伝えていくのか。今後につながる大きな課題を託されたように感じている。



活動内容をまとめた冊子「離島と映像」。ご希望の方は izucinema@gmail.com まで。

離島人材育成基金助成事業 事務局より

当助成事業の過去の採択事例では、祭りや伝統文化の掘り起こしを軸にしたものが多いですが、今回、伊豆諸島シネマセンターが取り組んだ住民の実生活や無人島化してしまったプロセスに焦点をあてて調査するというアプローチは他に類を見ません。

同センターは、映像資料を中心にビジュアル面から当時の様子を掘り下げつつ、実際に生活していた方々を交えてディスカッションも行なっています。登壇をお願いしたところ、難色を示される方もいたようですが、敬意と細心の注意を払いつつ話を伺い、部分的にでも暮らしの模様を記録に残すことに成功している点には大いに注目すべきです。当事業の成果物『離島と映像』は、今後の青ヶ島、八丈島、八丈小島の生活史調査にとって意義深い冊子であると言えるのではないのでしょうか。

令和6年度、同センターは再度当助成事業を活用し、「言葉」に主軸を置いた調査を始めています。昨年度事業で得た知見や関係性を活かし、さらなるリサーチや講座などの取り組みが進展することを楽しみにしています。

喪われゆく言葉^{ことば}を求めて

八丈小島出身者の「言葉」がわずしか残されていない現状を知った私たちは、高齢化や伝承の機会喪失によって消滅危機言語となっている「八丈語（八丈方言）」への興味も芽生えた。そこで、「島の宝を見つけ育てるプロジェクト——喪われゆく言葉を求めて」を二

〇二四年度の事業として開始した。

「喪われゆく言葉」とは、限られた記録しか残されてこなかった八丈小島の生活や離島についての体験者の言葉、および消滅危機言語としての「八丈語」を意味している。それぞれに焦点を当て、保存と共有、継承について議論する場を設けることによって、離島で生きていることの多様なあり方や、語り方に

ついて考える契機を創出したい。

また、伊豆諸島の各島々が「言葉」を通して交流することの可能性を広げるために八丈島の北隣、御蔵島でも「魅力発見講座」を開催するべく、各メディアの発掘作業を進めている。

今回の「離島人材育成基金」によって、伊豆諸島シネマセンターの活動のひとつの方向性が見えてきたように感じている。それは、さまざまなメディアを駆使することで「離島」とは何かについて思考する深い議論の場を発生させ、さらにそこから新たなプロジェクトが立ち上がるようなうねりを創り出す事だ。離島における有意義な場づくりに向け、試行錯誤を続けたい。

大澤 未来 おおさわ みらい

一九八一年生まれ、東京都中野区育ち。ドキュメンタリー映画監督。東日本大震災の前後をつなぐ三陸の祈りの世界を描いた長編映画『廻り神楽』共同監督。人類学におけるマルチス・ヒューシーズの概念をベースに離島における映像制作、上映会、講座を模索している。青ヶ島の映画を制作中。